

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	ピノキオ幼児舎荻窪保育園
法人名	株式会社ピノコーポレーション
法人所在地	東京都杉並区高円寺南4-26-16 ビクトリアプラザ3階

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「つくる」
～身近な素材や楽器を通して、試したり工夫したりしながら音をつくり探究する～

<テーマの設定理由>

廃材を使った工作に熱心に取り組む子が多く、同じ材料であっても作り方や発想によって全く違うものができることに興味を持つ姿が見られていた。そこで、身近な素材を使った制作活動を通して子どもたちの「作ってみたい」という気持ちを大切にしながら、試したり工夫したりする経験を重ねていくことを目的としてテーマを設定した。

2. 活動スケジュール

新聞紙と色養生テープでの工作。同じ素材で友だちとの違いを感じることをきっかけに子ども「作ってみたい」という気持ちを刺激しながら、様々な製作活動を通して、興味が出たことから探求を行った。

- ・4月 進級後、自由遊びの中で廃材等を使った制作遊びを好む姿が見られる。
- ・6月：新聞紙と色養生テープを使った工作を行う。同じ素材でも友だちによって作るものが異なることを感じる。
- ・7月：創作の話づくりを行い、自分の想像した内容を言葉にして物語として表現する。
- ・8月：紙コップや紙皿などの廃材を使った工作を行う。園内コンサートをきっかけに楽器づくりをする子どもが増える。また、園にある楽器に触れ、音の違いに興味を持つ。
- ・9月：新しく購入した楽器（太鼓、木琴、ウインドチャイム、シンバル、ギロ）を使い、簡単な演奏を楽しむ。
- ・10月：紙コップなどを叩いて音を出し、大きさや素材によって音が違うことに気付く。音のアプリを使った音当てクイズも行い、様々な音に興味を広げる。
- ・11月：クリスマス会に向けて楽器演奏の練習を行い、自分の好きな楽器を選んで取り組む。
- ・1月：雨の音など身近な音を聞き、「じょぼ」「ザー」など聞こえ方の違いに気付く。また、ストローと紙コップを使った音の出る玩具を作り、紙コップの大きさによる音の違いを試す。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

新聞紙や色養生テープを中心に、紙皿や紙コップなど大きさや形の異なる廃材を用意し、子どもが自由に素材を選びながら制作できる環境を整えた。また、園内コンサートをきっかけに楽器への興味が高まったことから、太鼓や木琴、ウインドチャイム、シンバル、ギロなどの楽器を新たに準備し、実際に触れて音を確認められるようにした。

様々な音に触れる機会として、パソコンを用いて自然、動物や生き物の鳴き声などを聞いてみる体験をしたり、自分たちでも音を作る活動を行えるよう紙コップの大きさやストローの長さなどを変えて音の違いを試せるよう素材の種類を複数用意し、子どもたちが自分で試したり比べたりできる環境を整えた。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

新聞紙と色養生テープを使った制作活動から活動を始め、同じ素材でも友だちによって作るものや形が違うことに気付く経験を大切にしました。制作を重ねる中で、子どもたちは自分なりの作り方を試したり、友だちの作り方を真似したりしながら表現を広げていった。

その後、園内コンサートをきっかけに楽器への興味が高まり、紙コップなどの廃材を使った楽器づくりや、園にある楽器に触れる活動へと発展していった。楽器に触れる中で、叩き方や素材、大きさによって音が変わることに気付き、紙コップの大きさの違いやストローの長さを変えながら音を試す姿が見られた。また、音のアプリを使った音当てクイズを行うことで、普段の生活の中にある様々な音にも興味を広げていった。

さらに、雨の音や動物の鳴き声などを聞き比べながら「どのように聞こえるか」を考えたり、ストローと紙コップを使った音の出る玩具づくりを行ったりするなど、音を試したり比べたりしながら表現する活動へと広がっていった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

制作活動では、作り方を子どもに任せることで、友だちの作品を見て真似をしたり、自分で考えたり、以前に教わった作り方を思い出して試したりする姿が見られた。また、テープが貼りづらい部分を友だちに手伝ってもらったりなど、子ども同士で協力する関わりも見られた。園内コンサートでは演奏家の方から様々な楽器に触れる機会をいただき、子どもたちは楽器に興味を持つようになった。また、楽器も工作で作ることができることを知り、「音」にも興味を持つ姿が見られた。

音に興味を持ってからは、音楽を通して遊ぶ姿が増え、自分で楽器を作ったり、同じ素材でも大きさや長さ、叩く強さによって音が違うことに気づいたりするなど、耳を澄ませて音を楽しむ様子が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

同じ素材を使っているにもかかわらず、子どもたちの発想によって全く違うものが生まれることを改めて感じた。また、友だちの作品を見ることで刺激を受け、新しい発想につながる姿も見られた。

音の捉え方についても、大人とは異なる自由な発想が見られた。例えばセミの鳴き声を「唐揚げの音」と表現するなど、子どもならではの柔軟な感性を感じることができた。子どもたちの興味や発言をきっかけに活動を広げていくことで、制作活動が音や表現の活動へと発展し、子どもたちの探究心につながる活動となった。